【論文】

1904 年から 1906 年に刊行された金島苔水の韓語学習書について
—例言と目次からみられる学習書としての特徴と諺文の説明を中心に—

齊藤　良子

1. はじめに

2002 年の韓流ブーム以降、急激に韓国語学習者が増加したことに伴い、韓国語・朝鮮語学習書も増加した。しかし、明治期にも韓国語・朝鮮語学習書、当時の「韓語」学習書の出版が急増した時期があった。

図 1 の明治期の 1900 年から 1910 年にかけての 10 年間に出版された日本人向け韓語学習書[1]の数をみると、研究[2]によりその数は若干異なるものの、1904 年から 1906 年の 3 年間に特に多くの韓語学習書が出版されていることがわかる。山田（2009）によれば、日露戦争後の 1905 年に朝鮮との間で第二次日韓条約（乙巳保護条約）が結ばれると、朝鮮への移住者は急増したという。そして、この時期の学習書を特徴づけるキーワードは、移住、貿易、軍事であり、「朝鮮に渡る日本人が増加するにつれて、彼らに向けて実用的な便宜を提供する目的で朝鮮語学習書が発行され始めた」としている。このことから、1905 年ごろの日本では朝鮮への移住を考える日本人の間で韓語学習への関心が高まり、それに合わせて多くの学習書が出版されたと考えられる。

桜井(1974)・植田(2006)・成玧姸(2009)・李康民(2015)

	桜井	植田	成玧姸	李康民
1900 年：	1 冊	0 冊	1 冊	1 冊
1901 年：	1 冊	1 冊	1 冊	1 冊
1902 年：	1 冊	1 冊	1 冊	1 冊
1903 年：	1 冊	1 冊	1 冊	1 冊
1904 年：	11 冊	13 冊	16 冊	14 冊
1905 年：	6 冊	8 冊	7 冊	7 冊
1906 年：	4 冊	6 冊	6 冊	4 冊
1907 年：	3 冊	2 冊	1 冊	1 冊
1908 年：	1 冊	0 冊	2 冊	0 冊
1909 年：	6 冊	6 冊	2 冊	2 冊
1910 年：	5 冊	5 冊	5 冊	4 冊

＊増訂版が含まれているかによって数に差がある

図 1　1900 年から 1910 年に日本で発売された日本人向け韓語学習書の出版数

明治期に出版された日本人向けの韓語学習書研究は、桜井（1956、1974a、1974b）、成玧姸（2008a、2008b、2014）、植田 (2006, 2007, 2014)、山田（2009）、齊藤明美（2014）、黄雲（2015）等によって行われている。桜井（1956、1974a、1974b）は明治期の日本における韓語学習書について網羅的に解題した。成玧姸（2008a、2008b、2014）は明治期の朝鮮語会話集の概要と特徴について解題し、形式・内容と構成・表記・言語意識について、その表記法や語法の変化と特徴、時代背景の影響等について分析している。植田（2006, 2007, 2014）は、現代の日本における朝鮮語教育史について明らかにしており、本研究で扱う金

島苔水（カナシマ　タイスイ）の著書についても、日本近代朝鮮語教育史の視点からみた商業出版物としての朝鮮語学習書の側面から分析した。山田（2009）では、朝鮮語教育や学習書の作られた背景や目的が明らかにされている。齊藤明美（2014）は、明治期の日本における韓語学習書について『交隣須知』との関係を中心に分析、研究を行った。黄雲（2015）は、韓国開化期における日本語教育について網羅的に研究しており、金島の学習書についても分析を行っている。

これらの研究では、金島苔水の学習書を含む、当時の韓語学習書を言語資料として分析することにより、明治期と現在の語彙や語法の違いを明らかにしている。また、当時の時代背景が反映されている史料として研究することにより、明治期の朝鮮語教育の置かれた状況についても明らかにされてきている。しかし、これらの学習書を外国語学習書として、その教授法等を分析した研究はあまりみられない。そこで、本稿では韓語学習書の出版が増加した1904年から1906年に金島苔水によって書かれた韓語学習書5冊を比較研究し、その特徴を明らかにする。

金島苔水、本名金島治三郎は1904年（明治37年）から1906年（明治39年）の間に『日韓會話三十日間速成』（1904年/明治37年）（以下『三十日』）、『韓語教科書』（1905年/明治38年）（以下『韓語』）、『對譯日韓新會話』（1905年/明治38年）（以下『新會話』）、『對譯日韓會話捷徑』（1905年/明治38年）（以下『捷徑』）、『日韓言語合璧』（1906年/明治39年）（以下『合璧』）の5冊の韓語学習書を著している。

成玧姈（2008, p39）は、金島について、「明治後期における代表的な朝鮮語の普及者といえよう。」としている。しかし、植田（2014, p69-70）は、金島の学習書について、「金島による著作は実用書であり（中略）時流に乗った売れ筋商品、おそらく作り本であるといえる。（中略）著者にとっても、自己のより豊かな物質的生活の追求のために、生涯のある時期に身に付けた朝鮮語を使い、生涯のある時期に時流に乗った本を、時には原稿の使い回しもして書いたという側面も見出せる。」（p69）としており、上記の成玧姈（2008）の言及についても「『朝鮮語の普及者』というような人物像は到底見えてこない。」（p70）としている。

このことから、金島が「朝鮮語の普及者である」かどうかについては意見の分かれるところではあるが、「時流に乗って」多くの学習書を出版した人物であることは確かである。そこで、本研究では1904年から1906年にかけて金島が出版した韓語学習書を通して、当時の韓語（現在の朝鮮語または韓国語）の学習書の特徴を明らかにしていきたいと考える。これは、2002年の韓流ブームから急激に朝鮮語学習者と学習書が増えた現在の視点で約100年前の学習書をみることにより、当時の朝鮮語教育について再考する契機となると考

えたためである。本研究では、金島の学習書 5 冊について、例言と目次からみられる学習書としての特徴と、諺文[3]の説明法について述べる。また、各節で現在の朝鮮語教育との比較も行う。

2. 先行研究

2.1　金島苔水について

本研究で取り上げる 5 冊の韓語学習書を作成した金島苔水の経歴や人物像については、いまだ明らかにされていない部分が多い。植田（2006）によれば、「朝鮮語を教えた人たち①（1872 ～ 1945 年）」（p11 ～ 12）や「東京外国語学校（1897 ～ 1972 年）卒業生」をはじめとする当時の学習者等のリストに金島の名前はないという。そのため、朝鮮語教師であった可能性は低いと考えられる。しかし、『三十日』の会話練習の例文[4]から、釜山在住の陸軍通訳である可能性があると思われる（植田 , 2014、黄雲 , 2015）。さらに、金島（1905）『日清会話語言類集』の「自序」[5]から、石塚松雲堂の編集者であった可能性もあり得るとされている（植田 , 2014）。

2.2 金島苔水の韓語学習書について

成玧姸（2014）は明治期の韓語学習書を作成した人物を挙げ、「島井浩、松岡馨、金島苔水、広野韓山、前間恭作のように同一の著者が類似した内容の会話書を何種類も出版する場合も少なくない。」としているが、島井浩は 4 冊、松岡馨は 2 冊、金島苔水は 5 冊、広野韓山は 4 冊、前間恭作は 2 冊出版しており、広野韓山の作成した 4 冊は全て金島苔水との共著である。このことから、この時代に最も多くの韓語学習書を作成していたのは金島苔水であるといえるだろう。また、多くの著書があることから、金島の韓語学習書が 1905 年当時の韓語教育の特徴を表しているのではないかと考えた。金島苔水の著書についての研究は植田（2014）があり日本近代朝鮮語教育史の視点から見た商業出版物として、金島の学習書を分析している。しかし、金島の学習書における韓語の説明方法や学習書としての特徴は十分には明らかにされてきていない。そのため、本研究で金島の学習書の特徴について明らかにすることは意義があると考える。なお、成玧姸（2014）の「同一の著者が類似の内容の会話書を何種類も出版する場合も少なくない。」と、植田（2014）の「金島による著者は実用書であり（中略）時には原稿の使い回しもして書いた」という指摘をうけ、学習書の中に類似点がある場合はそれについても述べる。なお、金島の著書は今回の研究対象である 5 冊の学習書を含め 13 冊あるが、本研究の分析対象以外の 5 冊は、語学学習と関係のないもの、日本語学習書、中国語（清語）学習書、朝鮮語学習書ではあるが本研究

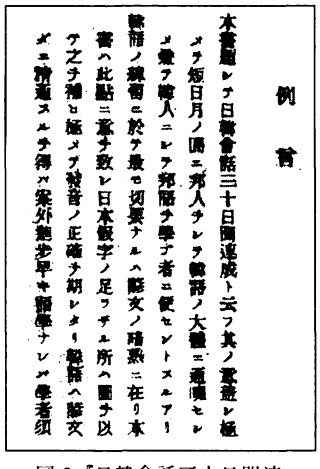
で分析対象とした1904年から1906年の間に出版されていないものであるため、本研究では先に述べた『三十日』、『韓語』、『新會話』、『捷徑』、『合壁』の5冊のみを分析対象として、その他の8冊[6]についてはここでは扱わないこととした。

3. 例言と目次からみられる学習書としての特徴

ここでは、各学習書の概要と学習書の一番初めに書かれている例言または自序および目次からみられる各学習書の目的、推奨する学習方法の特徴をみていく。構成については目次を基準にみていくが、目次に含まれていない、または本文と目次が異なる場合はそれを明記する。なお、紙幅の都合上、各学習書の目次は註に示す。また、例言・自序および目次からのみ構成を分析し、各章の内容については言及しないこととする。

3.1.『日韓會話三十日間速成』の例言と目次からみられる学習書としての特徴

『日韓會話三十日間速成』は全290頁であり、東京と大阪の青木嵩山堂から発行されている。『三十日』は、李鎮豊と金島苔水の共著である。桜井(1974b)によれば、李鎮豊については詳細不明である。構成の詳細は註[7]に示すが、大まかな構成は、第一編：諺文と文法の説明、第二編：会話（テーマに沿った会話集)、第三篇：単語である。「例言」は1頁から2頁にかけて書かれている。文章が漢字とカタカナで書かれている点、文末に「編者識」とある点は、『韓語』『捷径』の例言と共通している（図2参照)。例言に書かれた内容をみると、冒頭には、「本書題シテ日韓會話三十日間速成ト云ウ其ノ意盖シ極メテ短日月ノ間ニ邦人ヲシテ韓語ノ大体ニ通暁セシメ」(p1）とあり、学習書の書名の通りに、短時間で韓語が習得できることを記している。


例言

本書題シテ日韓會話三十日間速成ト云フ其ノ意盖シ極メテ短日月ノ間ニ邦人ヲシテ韓語ノ大體ニ通曉セシメ度ク編者ニシテ邦語ヲ學ブ者ニ便セントスルアリ韓語ノ練習ニ於テ最モ切要ナルハ諺文ノ暗熟ニ在リ本書ハ此點ニ意ヲ致シ日本假字ノ足ラザル所ハ圏ヲ以テ之ヲ補ヒ極メテ發音ノ正確ヲ期シタリ韓語ハ諺文ニ精通スルヲ得バ案外進歩早キ語學ナレバ學者須

図2『日韓會話三十日間速成』の例言(p1)

また、「韓語ノ練習ニ於イテ最モ切要ナルハ諺文ノ暗熟ニアリ（中略）極メテ発音ノ正確ヲ期シタリ韓語ハ諺文ダニ精通スルヲ得バ案外進歩早キ語学ナレバ学習スベカラク第一編ノ暗熟ニ怠ル可ラザルナリ」(p1-2)、つまり、韓語の練習において最も大切なことは諺文を読めるようになることである、としている。現在の朝鮮語教育においても、初級学習者にとって最も大切なことはハングルを読めるようになることである。この点は、現在の朝鮮語教育と共通する点であるといえる。また、この学習書は日本人が韓語を学ぶのみならず、韓国人が日本語を学ぶのにも使用できるとしている。

なお、『三十日』というタイトルにも関わらず、目次には「第三十日」の後に「第（空白）

日」という課があるが、どのような経緯でこの 1 課が足されたのかは明らかにされていない。

3.2.『韓語教科書』の例言と目次からみられる学習書としての特徴

『韓語』は全 290 頁であり、青木嵩山堂から発行されている。『韓語』は金島苔水と廣野韓山の共著である。ただし、表紙には「合著」とあるものの、奥付の著者名には金島の名前のみ記されている。『韓語』の構成の詳細は註[8]に示すが、大まかな構成は、第一部：諺文と文法の説明、第二部：会話（いろは順）、第三部：復習及び参考（テーマに沿った単語、または会話）である。

「例言」は 1 頁から 2 頁にかけて書かれており、まず初めに『韓語』は韓語教科書であるが日語[9]を学ぼうとする人にとっても「捷徑」つまり、近道であるとしている。また、日本仮名を用いて字音の注を書いたり、省いたりしているが、その理由を「學堂教科ノ用ニ供シ他ハ學者ノ自修ニ便センガ爲メナリ」としている。このように、学校で教科書として使用することについて言及しているものは金島の 5 冊の中ではこの 1 冊のみである。

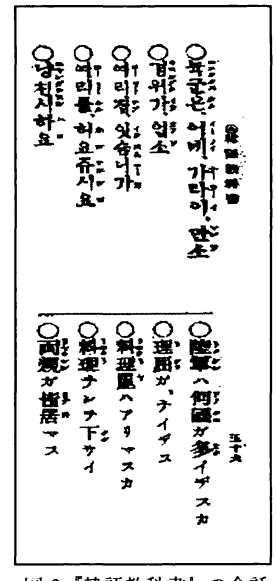


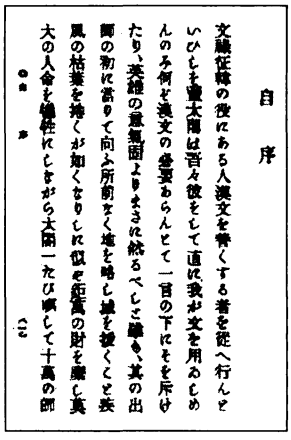
図 3『韓語教科書』の会話文抜粋（p56）

次に、目次をみると、『韓語』の「会話」はいろは順で並べられている。例えば、56 頁をみると「陸軍ハ何国ガ多イデスカ」の次に「理屈ガ、ナイデス」がきており、文脈とは関係なく会話文がいろは順に並べられていることが分かる（図 3 参照）。金島のほかの学習書同様、『韓語』の第三部にはテーマに沿った会話も掲載されているが、いろは順の会話は『韓語』の特徴であるともいえる。

なお、『韓語』の「第参部復習及ヒ参考」は『三十日』の「第三編」の単語集に類似している。『韓語』の「第参部復習及ヒ参考」のうち、単に題目のみのもの（例：第四十七章獣類）と「～連語」とついているもの（例：第六十一章獣類連語）があり、題目のみのものは単語集であり、『三十日』の「第三編」と単語も類似しているが、「～連語」は会話文である。そのため構成は大きく異なる。

3.3.『對譯日韓新會話』の例言と目次からみられる学習書としての特徴

『新會話』は全 361 頁であり、大阪の石塚猪男蔵から発行されている。金島苔水と廣野韓山の共著であり表紙にもそのように印刷されているが、奥付の著者はそれぞれの本名である金島治三郎と廣野榮次郎となっている。なお、表紙に「文法註解附」との副題のような


自序

文祿征韓の役にあら人漢文を書くする者を從へ行んと
いひしも豊太閤は吾々彼をして直に我が文を用ゐしめ
んのみ何ぞ漢文の必要あらんとて一言の下にそを斥け
たり、英雄の意氣固よりまさに然るべしと雖も、其の出
師の初に當りて向ふ所前なく地を略し城を拔くこと疾
風の枯葉を捲くが如くなりしに似ず鉅萬の財を費し眞
大の人命を犧牲にしながら大閤一たび薨して十萬の師

図4『對譯日韓新會話』の自序(p1)

文字がある。構成の詳細は註[10]に示すが、大まかな構成は第一章：諺文と文法の説明、第二章：会話（テーマに沿った会話集）、第三章：参考（単語）である。

なお、『新會話』には「例言」はなく、「自序」が1頁から7頁に記されている。「自序」が記されているのは5冊中、『新會話』のみである。他の3冊の例言はすべてカタカナと漢字で書かれているが、この「自序」は漢字とひらがなで書かれている（図4参照）。また、「例言」の文末には「編者識」とあるが、この「自序」の文末には「苔水識す」とある。なお、自序以外は他の4冊同様、カタカナと漢字を用いて書かれている。この「自序」をみると、文禄征韓からこの本が書かれた明治38年までの日韓関係と日本の韓語研究について触れながら、今まで韓国に行く際には日本語で十分であり韓語を研究しようという考えはあまりなかったが、それが日本人の事業が韓国で成功しない原因であるとしている。そして、韓国の知識を開発し根本的に韓国を改革しようとするならば韓語の研究を1日もおろそかにしてはならない、韓国を日本の「附庸」とするためにはその道しかない、韓語に熟達し韓国の国情に通じる日本人が一人でも多く韓国に渡航して日本の文化を移植するにあるのみである、としている。

この「自序」には山田（2009）、成玧姸（2014）でも指摘されているように、この時期の韓語学習の目的や背景が表れているといえる。また、韓語を学ぶ必要性について記しているのは5冊の学習書中、『新會話』の1冊のみである。ただし、学習書の自序以外の会話文等からは「韓国の知識を開発し根本的に韓国を改革」するために必要な言語を教えるための学習書であるという意思が明確に反映されていると感じられる箇所はないといえる。なお、この学習書は『三十日』、『韓語』同様、日本人が韓語を学ぶのみならず、韓国人が日本語を学ぶのにも使用できるとしている。

3.4.『對譯日韓會話捷徑』の例言と目次からみられる学習書としての特徴

『捷徑』は全247頁であり、大阪の石塚猪男蔵から発行されている。金島苔水と廣野韓山の共著であるが、『韓語』同様、奥付の著者名には金島の名前のみ記されている。『捷徑』の構成の詳細は註[11]に示すが、大まかな構成は、上編：諺文と文法の説明、下編：会話（単語および会話文）となっている。

「例言」は1頁から2頁にかけて書かれており、『捷徑』の目的を「初学習者ヲシテ可及的速ニ韓語殊ニ実用的語言ニ通暁セシムルニ在リ」[12]（p1）としている。これは書名に『捷

徑』つまり、「近道」という言葉が入っているためと思われる。また、初学習者には諺文は難しく飽きやすいので遠回りせず、多趣味に発音的智能を養成するために言文一致体を用いているとしている。このように「言文一致」に言及している点は当時の時代背景が反映されている点であるといえるだろう。また、漢字語を漢字の意味のまま日本語訳をせずに、正しい意味で訳していること、単語を先に知っていることが大切なので、各章ではまず単語を提示し、会話文によって応用を学んでもらいたいこと、韓語の勉強は読んでいるだけでは不十分であるため、何度も繰り返して忘れないようにすることが大切である、とも記している。

3.5.『日韓言語合壁』の例言と目次からみられる学習書としての特徴

『合壁』は全350頁であり、東京と大阪の青木嵩山堂から発行されている。金島苔水の単著である。『合壁』の構成の詳細は註[13]に示すが、大まかな概要は、上編：諺文と文法の説明、中編：単語、下編：会話（テーマに沿った会話集）である。

また、最後の「参考：雑語」は題目では単語が並んでいるようであるが297頁から350頁までの53頁にわたり、様々な会話文がテーマに沿って挙げられている（図5参照）。なお、『合壁』には例言等はなく『合壁』が作られた目的や使用方法などはわからない。

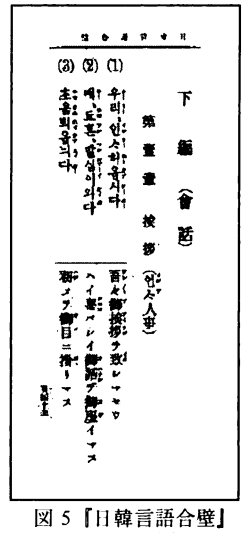

下編（會話）
第壹章　挨拶（朝夕人事）
(1)
(2)
(3)

図5『日韓言語合壁』会話文抜粋（p）143

3.6. 例言と目次からみられる学習書としての特徴のまとめ

ここでは5冊の学習書の例言と目次からみられる学習書としての特徴についてみてきた。まず、『三十日』『韓語』『捷徑』の3冊をみると、いずれも学習書の冒頭2頁から3頁で「例言」を掲載している。文末には個人名ではなく「編集識」と記されている。『三十日』と『捷徑』の「例言」をみると、『三十日』は「本書題シテ日韓會話三十日間速成ト云ウ其ノ意盖シ極メテ短日月ノ間ニ邦人ヲシテ韓語ノ大体ニ通暁セシメ」（p1）とし、『捷徑』では「初学習者ヲシテ可及的速ニ韓語殊ニ実用的語言ニ通暁セシムルニ在リ」（p1）とある。このことから、この2冊は学習書の書名通り、短時間で習得できることを強調していることがわかる。現在でも独学用に朝鮮語を短時間で習得できることを強調した学習書が多く出版されているため、『三十日』と『捷徑』の例言には独学用であるとは記されていないものの、独学用の学習書であったと考えられる。なお、『三十日』『捷徑』『新會話』には、どのような学習者に向けた学習書であるかについては言及されていないが、『韓語』のみ、独学と学校での教科書どちらにも使えると記され

ている。

次に『新會話』をみると、『新會話』には「例言」はなく、その代わりに、「自序」がある。「自序」は7頁に渡って書かれており、文末には「例言」と異なり「苔水識す」とある。この「自序」では、韓国を日本の「附庸」とするためにはその道しかない、韓語に熟達し韓国の国情に通じる日本人が一人でも多く韓国に渡航して日本の文化を移植するにあるのみである、といった当時の時代背景や韓語学習の意義が強く現れている。これは、『三十日』『捷徑』『新會話』の例言とは大きく異なる点である。しかし、すでに述べたとおり、「自序」からは強い意志を感じられるが、学習書の内容をみると、その意志が反映されているように感じられるところはあまりない。

なお、『合璧』には「例言」または「自序」はなく、『合璧』がどのような目的で作られたのかについては明らかではない。

次に目次をみると、5冊の学習書はいずれも、まず諺文と文法の説明があり、その後に会話または単語が収められている。会話についてみると、5冊すべてにテーマごとの会話例が掲載されているが、『韓語』のみ「いろは順」の会話も掲載されていた。現在の朝鮮語学習書の場合、旅行用やビジネス用等の実用性を重視した朝鮮語学習書では、テーマごとの章立てとなっていることが多いことから金島の学習書は実用的な目的で作成されたと考えられる。

次に、諺文と発音の習得についてみていく。『三十日』には、「韓語ノ練習ニ於イテ最モ切要ナルハ諺文ノ暗熟ニアリ（中略）極メテ発音ノ正確ヲ期シタリ韓語ハ諺文ダニ精通スルヲ得バ案外進歩早キ語学ナレバ学習スベカラク第一編ノ暗熟ニ怠ル可ラザルナリ」(p1-2）とあり、諺文と発音の習得を重視しているが、この点も現在の教育との共通点であるといえよう。また、『捷徑』には「発音的知能ヲ養成セシメンガ為ニ言文一致体ヲ採レリ」(p1）とあるが、現在の教科書でこのように言文一致について言及することはないため、この点は当時まだ言文一致が一般的でなかったことの表れであるともいえるだろう。

また、現在の朝鮮語学習書においては、『三十日』『韓語』『新會話』のように日本語学習にも使用可能であるとしている朝鮮語学習書はほとんどない。この点は当時の学習書の特徴である可能性が高いといえよう。

4. 韓語学習書の諺文の説明法について

ここでは金島の5冊の学習書における諺文の説明法をみていく。現在の朝鮮語学習書で朝鮮語の文字であるハングルについて説明する場合、「子音」と「母音」という名称を用いて説明する[14]。しかし、金島の学習書では現在では使用されていない「父音（フオン)」を

含む、「父音」・「母音」・「子音」の 3 つの名称を用いて説明している。まず、本研究で分析対象としている金島の 5 冊の学習書以外の明治期の韓語学習書で使用されている名称について述べた後、金島の 5 冊の学習書について説明していく。

まず、1900 年代以前に作成された韓語学習書[15]においては現在と同じ意味で、母音・子音を用いて説明している学習書と現在の母音が子音、現在の子音が母音として説明されている学習書（『日清韓三国対照会話篇』等）があった。1901 年～ 1903 年に出版された学習書をみると、現在と同じように子音・母音で教えている学習書（『朝鮮語独習』『日韓通話捷径』等）と現在は使用していない「父音ㄱ (k)/ ㄴ (n)/ ㄷ (t)」（現在の子音）と「母音ㅏ (a)/ ㅑ (ja)/ ㅓ (ɔ)」[16]（現在の母音）を使用する学習書（『実用韓語学』等）がみられた。

次に、本研究で分析対象としている金島の学習書と同じ時期（1904 年～ 1906 年）に金島と同様、複数の韓語学習書を作成している島井浩の学習書をみると、『実用韓語学』(1902,1906) と『実用日韓会話独学』(1905) では、父音（ㄱ / ㄴ / ㄷ）（現在の子音）・母音（ㅏ / ㅑ / ㅓ）（現在の母音）を使用し「子音」という名称は見られない。しかし、『日韓韓日新会話』(1906) では、父音（ㄱ / ㄴ / ㄷ）（現在の子音）・母音（ㅏ / ㅑ / ㅓ）（現在の母音）・子音（가 / 나 / 다）（子音と母音が一緒になっている文字。現在、この文字の呼び名はない）を使用している。また、1907 年～ 1910 年の学習書をみると現在と同じように、「父音」という名称を使用しておらず、子音・母音を用いている学習書（『朝鮮語独稽古』『韓語通』等）と父音・母音を使用し、子音を使用していない学習書（『日韓いろは辞典』等）、父音・母音・子音の全てを使用している学習書（『韓語文典』等）が混在している。このことから、現在では名称が固定している文字の名称が 1900 年代には定まっていなかったことがわかる。

これを踏まえて、本章では、金島の 5 冊の学習書の諺文の説明法をみていく。また、ここでは諺文の説明に使用された頁数（諺文の説明に限らず、諺文の由来、ハングルの説明、連音化等の発音規則等、文字の説明に使用されている頁数も含む）、諺文の発音の説明に口蓋図（口の中の舌の位置を表す図）が用いられているか、各学習書にみられる諺文、発音の説明にみられる特徴を中心にみていく。

4.1.『日韓會話三十日間速成』の諺文の説明

『三十日』は 37 頁を使って諺文について説明している。まずは「諺文ノ由來」「諺文ノ意義」について解説した後に、発音の仕方について説明している。なお、諺文の由来について述べているのは 5 冊中『三十日』と『合壁』のみである[17]。また、『三十日』では、口蓋図と文章で詳しく舌と歯の位置、音および息の出し方などが説明されている（図 6 参照）。

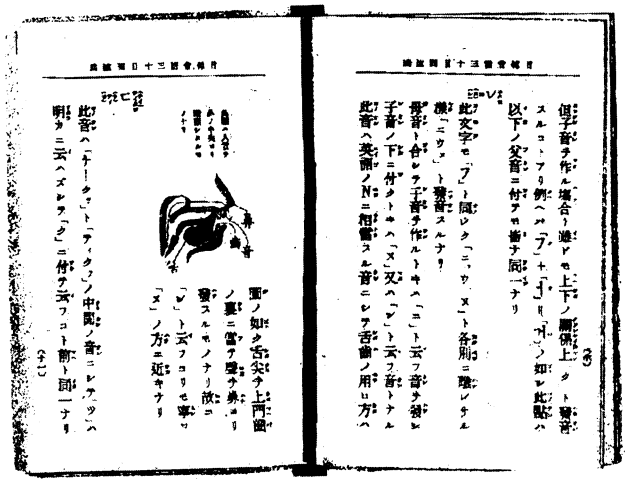


図 6『日韓會話三十日間速成』諺文説明抜粋

なお、口蓋図は父音（現在の子音）の説明の一部にのみ使用されている。

名称としては、父音（現在の子音）・母音（現在の母音）・子音（父音と母音が組み合わされた文字、現在は名称なし）を使用している。なお、諺文の表にはアルファベットが併記されていたり（例：ㄱ キ K：가 カ KA：갸　キャ　KYA）(p22)、ㄴ (n) の説明において、「此音ハ英語ノNニ相當スル」(p10) とあり、学習者がアルファベットを読めることを前提としていることがわかる。

4.2.『韓語教科書』の諺文の説明

『韓語』は 26 頁を使って諺文について説明している。『韓語』の「第壹編」の諺文の発音の説明は『三十日』と酷似している。例えば発音を教える際に『三十日』と同じ口蓋図、諺文表を用いている。文字の名称は、父音（現在の子音）・母音（現在の母音）・子音（母音と父音が一つになった文字）を用いている。また「第七章諺文讀方」で連音化の例として出されている単語は『三十日』の「第四章諺文ノ讀方」と全く同じである。このことから、成玧姸（2014）と植田（2014）が指摘した通り、使いまわしている部分があることがわかる。

4.3.『對譯日韓新會話』の諺文の説明

『新會話』では諺文を 42 頁にわたって解説している。目次をみると前半部分は『三十日』に酷似しているが、実際には『三十日』にあるような口蓋図はない。文字の名称をみると、『三十日』と『韓語』では父音は現在の子音、母音は現在と同じ母音の意味であったが、『新會話』から、「父音」が現在の母音、「母音」が現在の子音を指す言葉へと改称された。なお、子音（母音と父音が一つになった文字）は『三十日』、『韓語』ともに同じ意味で使われている。この改称は『新會話』からであり、『新會話』以降に出版された『捷徑』『合壁』はこの名称で統一されている。なお、『新會話』ではなぜ、母音、父音、子音の名称を

変更したのかについて下記のように説明している。

> 父音、母音ノ名称ハ古ヘ返切ト名付ケタルモノ諺文ト云フハ今来ノ事ナリ我ガ五十音ノ如ク「ㅏㅑㅓㅕ」等ノ十一字ヲ母音ト定メ「ㄱㄴㄷㄹ」等ノ十四字ヲ子音トシタリシカド後チ母音ハ其儘母音トシ十四字ノ子音ヲ父音ト変称シソノ他「가」「갸」「거」「겨」等ヲ子音ト呼ブニ至レリ、即チ父音「ㄱ」ト母音「ㅏ」トヲ配合シテ「가」ナル子音ヲ生出スナリト云ウ実ニ一理アルナリ、然レドモ今来之レニ反対ヲ唱フルモノ出テ来レリ其ハ正反対ニ母音ヲ父音トシ母音ト改称スルノ正当ナルヲ解ケリ余モ亦其一人ナリ、故ニ今回ハ従来ノ母音ヲ父音トシ父音ヲ母音ト改称セリ学者夫レ克ク之レヲ諒セラレンコトヲ乞フト同時ニ敢而江湖諸賢ノ高評ヲ乞フ（p.23 -4）。

上記の説明によれば、父音と母音の名称は古くは、「ㅏ (a) ㅑ (ja) ㅓ (ɔ) ㅕ (jɔ)」が母音（現在の母音）、「ㄱ (k) ㄴ (n) ㄷ (t) ㄹ (r)」が子音（現在の子音）であったが、その後、父音（現在の子音）・母音（現在の母音）・子音（母音と父音が一つになった文字）を用いるようになった。しかし現在、これに反対する者がでてきており、それまでの母音（現在の母音）と父音（現在の子音）を改称し、当時の母音（現在の母音）を「父音」として、当時の父音（現在の子音）を母音とすることが正当であるとする者が出てきたが、金島自身もその一人であるとしている。

このように、金島自身の考えを明確にしたうえで改称したことには、当時の朝鮮語教育の時流が反映されていると考える。しかし、改称する理由についてあえて説明をしていることから、現在の母音を「父音」、現在の子音を「母音」とするというのは当時の韓語学習書または学習者にとっては、あまり一般的ではなかったのではないかと考えられる。また、なぜ改称することが「正当」であるのかは明らかにされていない。

4.4.『對譯日韓會話捷徑』の諺文の説明

『捷徑』では諺文の説明に 47 頁を使用している。また、初めに諺文の表から入り、表は諺文とカタカナが示されている。これは発音の説明を終えた後に諺文、カタカナ、アルファベットの表記された表を示している『三十日』『韓語』『新會話』とは異なっている。諺文の名称は、父音（現在の母音）・母音（現在の子音）・子音（母音と父音が一つになった文字）を用いている。

次に父音（現在の母音）の説明をみると、「父音ノ発音ハ余程大切ナモノデ此発音ガ十分完全ニ出来ヌ様デハ子音ノ発音モ出来ズ又綴リ字ノ発音モ出来ヌ如斯大切ナ父音ノ発音ヲ

研究セズ会話ヲ記憶シテ応用シタ所デ対話者ニハ通ジナイ」(p7-8) として、父音（現在の母音）の発音の重要性を訴え、その発音方法を丁寧に説明している。特に『三十日』『韓語』『新會話』にはみられなった音の長短に着目し解説している。例えば「ㅏ (a)」については「我邦ノ「ア」ト「アー」トノ中間ノ速度ニ準據レバヨイ」(p9) とある。また、「ㅗ (o) ㅛ (jo)」については「我ガ「オ、ヨ」ニ等イガ（中略）我ガ「オヨ」ヲ發音スルヨリ今少シ唇ヲ閉塞グ心地ガアレバ宜イ」(p11) と説明した後に「ㅗ (o) ㅛ (jo)」と「ㅓ (ɔ) ㅕ (jɔ)」の発音の違いについて8行にわたり説明している。これは、『新會話』での説明、「ㅗ ㅛ　ハ我ガ「オ」「ヨ」ニ略等シケレバ之レガ説明ヲ略ス」「ㅜ ㅠハ我ガ「ウ」「ユ」ニ略ボ等シキモ我ガ「ウ」「ユ」ヲ発音スルヨリモ一層唇ヲ蕾メ発音セバ可ナリ」(p5) や、『三十日』の説明（現在の母音のうち「「ㅓ」「ㅕ」及ビ「ㅡ（齊藤補足：ɯ)」「ㅜ」ヲ除ク外ハ我国ニ存スル音ナレバ其説明ヲ略シ（略)」(p19)）とは異なる傾向である。

なお、母音の説明については『三十日』『韓語』に掲載された口蓋図はなく、『新會話』同様に文字のみでの解説となっている。また、ㄷ (t) の説明では「ㄷハ英語ノ「T」ニ相当スル音」(p19) とあり、『新会話』の「英語ノ「T」ニ相当スルモノナリ」(p15) や、『三十日』のㄴ (n) の説明で「此音ハ英語ノNニ相當スル」(p10) とした点が類似している。

4.5.『日韓言語合壁』の諺文の説明

『合壁』では諺文の説明に46頁を費やしている。『合壁』は、まず諺文とはどのような起源で出来た文字なのかといった説明から始まっている。すでに述べた通り、諺文の成り立ちについて説明をしているのは、『合壁』と『三十日』のみである。諺文の説明は、口蓋図はなく文字のみの解説で、「其ノ組立ノ方法ハ母音ト父音トヲ結合シテ子音ヲ生ズル具合ハ丁度我ガ五十音ノ横列「アカサタナ」等ノサト母音「アイウエオ」ノウト結合シテスヲ生ジ」(p4) と日本語の仮名を例に出してから「諺文區分表」を掲載している。このように、諺文の母音と子音を五十音に準えたのは『合壁』のみである。

発音の説明は、『捷徑』と『三十日』を合わせたような説明である。例えば、『捷徑』と同じく口蓋図はなく、解説は文字のみで、諺文區分表は『捷徑』と同じで諺文とカタカナで書かれている。また、『捷徑』と同じような文言で母音の発音の重要性を訴えている一方で、その説明は『三十日』と同様に非常に簡単である。例えば、「ㅏㅑ」と「ㅓㅕ」の説明は『捷徑』同様にその発音の長短を説明しているが、その解説は2行のみである (p8)。また、「ㅗ　ㅛ」については「ㅗ　ㅛハ我ガ「オ、ヨ」ニ等シイ」(p9) とするにとどまっている。

4.6. 諺文の説明のまとめ

ここでは 5 冊の諺文の説明についてみてきた。第一に、5 冊で共通していることについて述べると、すべてにおいて、数十頁をかけて諺文について説明している点をあげることができる。これは現在の朝鮮語学習書も同様であるが、諺文またはハングルの読み方の習得を促すために、丁寧に説明することは、明治期も現在も共通しているといえる。ただし、口の中の舌の位置を示す口蓋図が掲載されているのは『三十日』と『韓語』の現在の子音の説明の箇所のみである。つまり、口蓋図のない現在の母音や子音の説明は全て文章による説明であるため、当時これらの学習書を使って学んでいた学習者がどの程度、諺文の読み方を習得できたのかについては疑問が残る。ただし、すでに「例言と目次からみられる学習書としての特徴」のところでも述べたが、『韓語』の一部を除く全ての諺文にカタカナで振り仮名が振られているため、振り仮名なしで諺文を読めるようすることを目指している学習書ではないのではないかと考える。これは現在の朝鮮語学習書にも共通する部分がある。学校や塾等で使用される教科書の場合、振り仮名が振られているものは少ないが、独学用の学習書の場合、最初から最後まで全てのハングルに振り仮名が振られているものが多い。そのため、本研究で分析対象とした『韓語』を除く 4 冊は、独学で学ぶ学習者を念頭においたものであった可能性があると考えられる。

第二に、諺文の名称についてみると、『三十日』『韓語』では、「父音」が現在の子音、「母音」が現在の母音、「子音」が現在は名称のない母音と父音が一つになった文字を示している。また、『新會話』『捷徑』『合璧』では、「父音」が現在の母音、「母音」が現在の子音、「子音」が現在は名称のない母音と父音が一つになった文字を示している。これはすでに述べたように、この名称の変化は金島以外の学習書でもみられる傾向であったため、現在では固定されている文字の名称が明治期には固定されていなかったことがわかる。いつから現在の名称に固定され、父音という名称が使われなくなったのかについては、さらなる史料研究が求められる。

第三に現在の母音の発音の重視化についてみていく。まず、『三十日』と『韓語』をみると、現在の母音のㅏ (a)、ㅓ (ɔ)、ㅕ (jɔ)、ㅡ (ɯ)、ㅜ (u) 以外は説明されていないが、『新会話』では現在の母音全てについて説明されている。『捷徑』では父音（現在の母音）の発音が完璧にできなければならないとし、それぞれの説明も長く丁寧である。そして、後に出版した『合璧』では、『捷徑』の様には丁寧に説明していないものの、父音（現在の母音）の発音が完璧にできなければならない、としている。これにより、金島が 5 冊の学習書が発刊された 3 年間のなかで次第に母音の重要性を認識していったことが感じられる。現代の朝鮮語学習書をみると、母音についての説明はあるものの、母音に限らず発音が完璧に

出来なければならない、といった説明はあまりされていない。この違いは学習書の著者の違いによるものなのか、時代の違いなのかは明らかにされていない。

5. 結論

本稿では、1904年から1906年に作成された金島苔水の5冊の韓語学習書『日韓會話三十日間速成』(1904年/明治37年)、『韓語教科書』(1905年/明治38年)、『對譯日韓新會話』(1905年/明治38年)、『對譯日韓會話捷徑』(1905年/明治38年)、『日韓言語合璧』(1906年/明治39年)の5冊から当時の韓語学習書の特徴を明らかにするために、例言と目次からみられる学習書としての特徴と、諺文の説明の側面から比較、研究した。その結果、次のことが明らかにされた。

〈例言と目次からみられる学習書としての特徴〉

①例言について：『三十日』『韓語』『捷徑』の3冊の冒頭に「例言」が示されている。ページ数はいずれも2~3頁である。『韓語』には独学、学校で用いる教科書どちらにも使えると記されている。『三十日』と『捷徑』には独学用、学校用の明記はないが、両方の学習書ともに短時間で韓語が習得できることを強調していることから独学用の学習書であったのではないかと考えられる。また学習方法に関する助言や諺文の重要性なども記されている。

②「自序」について：『新會話』には「例言」はなく「自序」のみが7頁に渡って書かれている。「自序」には、当時の時代背景や韓語学習の意義が強く現れている。しかし、「自序」からは強い意志を感じられるが、学習書の内容をみるとその意志が反映されているように感じられるところはあまりない。

なお、『合璧』には「例言」または「自序」はなく、『合璧』がどのような目的で作られたのかについては明らかではない。

③目次からみられる特徴：5冊の学習書はいずれも、初めの章で諺文と文法の説明をして、次の章にテーマに沿った会話（『韓語』ではいろは順の会話も掲載されている）または単語を掲載している。5冊の学習書の構成は類似しているが、これが金島の学習書の特徴なのか、明治期の学習書の特徴であるのかについては更なる史料研究が求められる。

④会話について：5冊すべてにテーマごとの会話例が掲載されている。これは現在のビジ

ネス会話や旅行会話等、実用性を重んじる独学用の会話学習書にみられる構成であるため、金島の学習書は実用的な独学用の韓語学習書であったと考える。

⑤日本語学習書としての役割：『三十日』『韓語』『新會話』は日本語学習書としても使用可能であると明記している。現在、日本語の学習書としても使用できるとしている朝鮮語学習書はほとんどないため、この点は当時の学習書の特徴である可能性が高いといえよう。

〈諺文の説明について〉

①説明に要した頁数について：5 冊全てで数十頁に渡り諺文について説明している。これは現在の朝鮮語学習書と同様である。

②口蓋図について：口の中の舌の位置を示す口蓋図は『三十日』と『韓語』の現在の子音の説明の箇所のみに掲載されている。そのほかの母音や子音の説明は全て文字によるものである。

③振り仮名について：『三十日』『捷径』『新會話』『合壁』では、ほぼ全ての諺文にカタカナで振り仮名が振られている。このことから、現在の独学用の学習書同様、振り仮名なしで諺文を読めるようすることを目指している学習書ではないのではないか、と考える。ただし、『韓語』は学校の教科書としても使用できることを明記しているため、諺文に振り仮名が振られていない章がある。これも現代の授業で使用する教科書との共通点であるといえる。

④諺文の名称について：『三十日』『韓語』は、「父音」が現在の子音、「母音」が現在の母音、「子音」が現在は名称のない母音と父音が一つになった文字を示している。一方、『新會話』『捷徑』『合壁』は、「父音」が現在の母音、「母音」が現在の子音、「子音」が現在は名称のない母音と父音が一つになった文字を示している。このことから、現在は固定されている名称が明治期はまだ変化の過渡期であったことがうかがわれる。

⑤母音の発音の重視化について：『三十日』と『韓語』は、現在の母音のㅏ (a)、ㅓ (ɔ)、ㅕ (jɔ)、ㅡ (ɯ)、ㅜ (u) 以外[18]は説明されていないが、『新会話』では現在の母音全てについて説明されている。また、『捷徑』では父音（現在の母音）の発音が完璧にできなければならないとし、それぞれの説明も長く丁寧である。そして、『合壁』でも父音（現在の母音）の

発音が完璧にできなければならない、としている。このことから、金島が次第に母音の重要性を認識していったことが感じられる。

以上が金島の5冊の韓語学習書を比較して明らかになった明治期の韓語学習書の特徴と現在の学習書との共通点・相違点である。しかし、本研究で分析対象とした5冊の学習書のみの分析研究では、明治期の韓語学習書の特徴を十分に明らかにできたとはいえない。特に、名称の変化がみられた父音、母音、子音がどのように現在の名称へと固定されていったのか、なぜ当時金島は改称が「正当」であると考えたのかといった点は明らかにできなかった。この点を明らかにするためには更なる史料研究が必要であるため、今後の課題としたい。

註

1 「韓語」とは、現在の韓国語・朝鮮語のことである。本稿には、韓語、韓国語、朝鮮語の3つの名称が出てくるが、全て同じ言語である。

2 桜井(1974)・植田(2006)・成玩姸(2009)・李康民(2015)はそれぞれ当時出版された韓語学習書について解題している。

3 諺文（オンモン）とは、朝鮮固有の文字である。現在ハングルといわれる文字のこと。ただし、今回分析する学習書内では「ゲンブン」と振り仮名が振られている。

4 『日韓會話三十日間速成』p121「御姓名（ゴセイメイ）ハ何（ナン）ト申（マヲ）サレマス」「私（ワタクシ）ハ、金島（カナシマ）苔水（タイスイ）デス」「御職名（オヤク）ハ何（ナン）デスカ」「陸軍通訳（リクグンツウヤク）デス」/ p122「ドコニ、御住（オスマイ）ナサルカ」「私ハ釜山（プーサン）ニ住（ス）ミマス」

5 「明治三十八年五月三十一日波羅的艦隊全滅の広報号外を手にして / 感極つて泣きつつ石塚松雲堂編輯局に於いて」（金島苔水(1905)『日清会話語言類集』の自序より）

6 金島治三郎(1893)『万民重宝うらなゐ博士西洋易法』/ 金島治三郎(1904)『家庭講話母のつとめ』/ 金島苔水(1905)『韓文日本豪傑桃太郎伝』/ 金島苔水, 広野韓山(1905)『独修自在日語捷径』/ 金島苔水(1905)『日清会話語言類集』/ 金島苔水(1934)『日鮮会話独修：対訳』/ 金島苔水・広野韓山(1934)『日鮮語新会話：三カ月卒業 附・文法註解』/ 金島苔水(1935)『誰にもわかる支那語の初から』

7 『日韓會話三十日間速成』の構成

例言（目次の前にあり目次には含まれていない）、第一編豫修：第一章諺文ノ由來、第二章諺文の意義、第一節父音、第二節父音ノ發音、第三節母音、第四節母音ノ發音、第五節子音、第六節濁音、第三章諺文ノ綴方、第一節各音ノ右傍ニ「丨」ヲ添加ルス例、第二節各音ノ左傍ニ「ㅅ」ヲ添加ルス例、第三節各音ノ下ニ父音ヲ添加ルス例、第四節重音及重激音、第五節數個ノ父母音結合スル例、第四章諺文ノ讀方、第五章代名詞、第一節人稱代名詞、第二節指示代名詞、第三節疑問代名詞、第六章副詞、第七節接續詞、第八章動詞、第九章形容詞

第二編會話：第一日語學、第二日天候、第三日基數、第四日雑話ノ一、第五日訪問ト接客、第六日水ト火、第七日年稱、第八日動物、第九日花卉、第十日月稱、第十一日地理、第十二日起（本来は旧

漢字）臥、第十三日通信、第十四日雑話ノニ、第十五日日稱、第十六日、第十七日時ニ関スル話、第十八日訪問ト接客ノ二、第十九日旅行、第二十日挨拶、第二十一日通貨ニ関スル話、第二十二日疾病ト治療、第二十三日乗船、第二十四日天候ノ二、第二十五日會飲、第二十六日軍用雑話、第二十七日汽車、第二十八日商業、第二十九日食事、第三十日軍事行政、（＊第三十日の後に目次にはないが、本文には「第　日」という日にちが空白になっている課がある。ここは「売買」を扱っている。）

第三編：第一章數字、第二章年月日時、第三章貨幣ノ算數、第四章斗量、尺度、衡量、第五章數ニ関スル雑稱、第六章暦、四季、第七章七曜日、第八章天文、第九章地理、第十章方位、第十一章國土及國名、第十二章人族、第十三章身體、第十四章疾病及藥劑、第十五章官位、職業、第十六章官署、第十七章建設物、第十八章家屋及其附属物、第十九章家具並（本来は旧漢字）用品、雑具、第二十章金屬及寶石、第二十一章文藝、遊戯及文房具、第二十二章衣冠、第二十三章織物、第二十四章飲食物、第二十五章穀菜、第二十六章草木、第二十七章獣類、第二十八章鳥類、第二十九章水族、第三十章蟲類、第三十一章農業、第三十二章工業、第三十三章商業、第三十四章貿易品、第三十五章交通、船車、第三十六章轍道、第三十七章旅行、第三十八章軍事、第三十九章公事、第四十章雑事

8 『韓語教科書』（1905年/明治38年）の構成

例言（目次より前にあり目次には含まれていない）、第壹編：第一章諺文、第二章父音、第三章母音、第四章子音、第五章諺文ノ綴方、第六章重音及重激音、第七章諺文讀方、第八章副詞、第九章接續詞、第十章動詞、第十一章形容詞

第貳部會話：い之部、ろ之部、は之部、に之部、ほ之部、へ之部、と之部、ち之部、り之部、ぬ之部、る之部、を之部、わ之部、か之部、よ之部、た之部、れ之部、そ之部、つ之部、ね之部、な之部、ら之部、む之部、う之部、の之部、く之部、や之部、ま之部、け之部、ふ之部、こ之部、て之部、あ之部、さ之部、き之部、ゆ之部、め之部、み之部、し之部、ゑ之部、ひ之部、も之部、せ之部、す之部、

第参部復習及ヒ参考：第一章數字、第二章年月日時、第三章貨幣ノ算數、第四章斗量、尺度、衡量、第五章數ニ關スル雑稱、第六章暦、四季、第七章十干、十二支、第八章七曜日、第九章天文、第十章基數連語、第十一章時稱連語、第十二章數ニ關スル雑稱、第十三章天候、四季連語、第十四章地理、第十五章方位、第十六章國土及國名、地理、第十七章人族、第十八章身體、第十九章疾病及藥劑、第二十章地理連語、第二十一章國土及地名連語、第二十二章人族連語、第二十三章身體連語、第二十四章疾病及藥劑連語、第二十五章官位、職業、第二十六章菅署、第二十七章建設物、第二十八章家屋及其附属物、第二十九章家具幷（本文では「並」の旧仮名）用品、雑集、第三十章金屬及玉石、第三十一章文藝、遊戯及文房具、第三十二章衣冠、第三十三章織物、第三十四章飲食物、第三十五章穀菜、第三十六章草木、第三十七章官位職業連語、第三十八章家屋連語、第三十九章家具連語、第四十章金屬及玉石連語、第四十一章文藝遊戯及文房具類連語、第四十二章衣冠連語、第四十三章織物連語、第四十四章食事連語、第四十五章穀菜連語、第四十六章草木連語、第四十七章獣類、第四十八章鳥獣、第四十九章水族、第五十章蟲類、第五十一章農業、第五十二章工業、第五十三章商業、第五十四章貿易品、第五十五章交通船車、第五十六章轍道、第五十七章旅行、第五十八章軍事、第五十九章公事、第六十章雑事、第六十一章獣類連語、第六十二章鳥類連語、第六十三章魚類連語、第六十四章旅行連語、第六十五章軍事連語

9 日語とは日本語のことである

10 『對譯日韓新會話』（1905年/明治38年）の構成

自序（目次の前にあり、目次には含まれていない）、目次、第壹編（本文では「第一編」）：語學、第壹章（本文では「第一章」）父、母、子音ノ意義及其發音、第壹節（本文では「第一節」）父音、第

貳節（本文では「第二節」）父音ノ發音、第三節母音、第四節母音ノ發音、第五節子音、第六節濁音、第貳章（本文では「第二章」）諺文ノ綴方、第壹節（本文では「第一節」）各音ノ右傍ニ「丨」ヲ添加ルス例、第貳節（本文では「第二節」）同「ㅅ」ヲ添加ルス例、第三章諺文ノ讀方（＊目次にはこの位置にあるが本文では、第四章の直前にある。目次が誤植だとすれば、第二章が第二節までで、第三章が第三節から始まっている不自然さも理解できる。）、第三節各音ノ下ニ父音ヲ添加ルス例、第四節重音及重激音幷ニ數個ノ父母音ヲ結合スル例、第四章代名詞、第壹節（本文では「第一節」）人稱代名詞、第貳節（本文では「第二節」）指示代名詞、第五章副詞、（＊目次にはこの位置にあるが本文では、第四章第三節の後にある。第四章が第二節までで、第五章が第三節から始まっている不自然さからも誤植であるといえるだろう。）第三節疑問、代名詞、第六章助辭、第七章形容詞、第壹節語尾切斷的、第二節連體的及接續的、第三節前調（接續的）、第八章働語、第壹節語尾（切斷的）、第貳節自他者

第貳編（本文では「第一編」）：會話、第壹章（本文では「第一章」）訪問、第貳章（本文では「第二章」）挨拶、第三章散歩、第四章學校、第五章時間、第六章天候、第七章（四季）春、第八章夏、第九章秋、第十章冬、第十一章食事、第十二章外國語、第十三章緣日、第十四章役所、第十五章郵便局、第十六章書店、第十七章鐵道、第十八章鐵道馬車、第十九章瀛船、第二十章人力車、第二十一章宿屋、第二十二章料理屋、第二十三章年賀、第二十四章新聞、第二十五章銀行、第二十六章時計屋、第二十七章魚屋、第二十八章質屋（典當局）、第二十九章酒屋、第三十章醤油屋、第三十一章病院、第三十二章砂糖屋、第三十三章商業、第三十四章舶來店、第三十五章仕立屋、第三十六章招待（對接）、第三十七章兒童、第三十八章學生、第三十九章菅吏、第四十章人族

第三編：参考、第一章基數、第二章年月日時稱、第三章貨幣、第四章量、尺、度及單獨稱量、第五章名詞及其附屬、草木、穀菜、禽、蟲、魚、貿易品、文房具、飲食、家具雑技、商工農及雑、舟車、國土及都邑所名、官位、人族、身体、第六章雑單語三百集、附録苗字（姓）

11『對譯日韓捷徑』（1905 年 / 明治 38 年）の構成

例言、目次、上編：第一章諺文ノ音、第一節諺文區分表、第二節列及開口、舌、牙、平、輕、咽喉、唇激音、第三節父音、第四節母音、第五節子音、第六節重音及重激音、第七節濁音、第二章、第一節「丨」ノ綴方、第二節「ㅅ」ノ綴方、第三章讀方、第四章接續的、助詞ノ法則表、第五章動詞、第一節三格表、第二節自他表、第三節連體的三格表、第四節希求言、第六章形容詞

下編：第一章基數、第二章四季及年稱、第三章月稱、第四章日稱、第五章時稱、第六章宇宙、第七章方位、第八章建造物、第九章國土及都邑、第十章金屬及寶石、第十一章人族、第十貳章官位、第十三章親族、第十四章身體、第十五章疾病、第十六章家宅及家具、第十七章飲食物食器具、第十八章着衣及附屬雑品、第十九章文具附屬雑品、第二十章（本文では「第廿章」）果實及草木、第二十一章（本文では「第廿一章」）水族、第二十二章鳥類、第二十三章（本文では「第廿三章」）蟲類、第二十四章（本文では「第廿四章」）獣類、第二十五章（本文では「第廿五章」）商業雑語、附録：單語雑語、日本姓字集

12 韓語学習書は旧漢字が使用されているが、本論文では韓語学習書から直接引用をする際、漢字は現代語表記を用いる。ただし、各書の書名と目次については旧漢字を用いることとする。

13『日韓言語合璧』（1906 年 / 明治 39 年）の構成

上編：第壹章、第一節諺文、第二節父音、第三節母音、第四節子音、第五節列及諸音、第六節重音及重激音、第七節濁音、第貳章綴字、第一節「丨」ノ綴方、第二節「ㅅ」ノ綴方、第三節他ノ母音ノ綴方、第參章讀方、第一節（本文では「第壹節」）字體ノ讀方、第二節（本文では「第貳節」）連續體ノ讀方、第四章接續詞、助辭ノ表附基法則

中編：第一章雑短語、第二章前章ノ續、第三章前章ノ續（人稱）、第四章基數短語、第五章貨幣ノ算數、第六章前章ノ續、第七章時數及日月年數、第八章度量衡、第九章天然及四季、第十章身體及人

族、第十一章疾病及藥劑、第十二章禽獸及魚族、第十三章酷菜、第十四章蟲類及魚族、第十五章草木及果實

下編：會話第一章訪問、第二章挨拶、第三章散歩（遊歩）、第四章學校、第五章外國語、第六章地理、第七章旅行、第八章國土及國名、第九章遊山、第十章旅館、第十一章商業、第十二章職業、第十三章衣服、第十四章家宅、第十五章家具及日需品、第十六章飲食、第十七章氣候、第十八章火輪車及火輪船、第十九章官位、第二十章軍事、第二十一章官衙、第二十二章海軍、第二十三章武具、第二十四章市場、第二十五章禽獸、参考：雑語

14 ハングルでは文字の左側に子音を、右側に母音を書く。ハングルは子音と母音で構成されており、子音のみ、母音のみでは文字として成立しない。例えばㄱ (k) とㅏ (a) が一つの文字を構成し、「가 (ka)」となる。

15 宝迫繁勝（1881）『日韓善隣通語』/ 赤峯瀬一郎（1892）『日韓英三国対話』/ 国分健見（1893）『日韓通話』参謀本部（1894）『日韓会話』/ 松岡馨 (1894)『朝鮮語学独案内』

16 ( ) 内は発音記号である。

17『三十日』では『諺文ノ由来』の節（p1-4）で諺文について説明している。説明されている内容の要約は次の通りである。日本の五十音、いろは仮名と同じ理由で存在するものであり、記号文字即ち、欧文、梵語のように音の符号をなすものである。1330 ～ 40 年頃に作られた。漢字の力を借りなくても、諺文のみを用いることができる。

18 朝鮮語の基本母音は 11 個ある。

参考文献

植田晃次（2006）『報告集（１）朝鮮語教育史人物情報資料集』

植田晃次（2007）『研究報告書日本現代朝鮮語教育史』

植田晃次（2014）「金島苔水とその著書―日本近代朝鮮語教育史の視点からみた商業出版物としての朝鮮語学習書―」『日本语言文化研究』第 3 辑 上 pp.63 -72 延边大学出版社

黄雲（2015）「韓国開化期における日本語教育に関する研究」麗澤大学博士論文

齊藤明美（2014）『明治期の日本における韓語学習書研究：『交隣須知』との関係を中心に』인문사

桜井義之（1956）「宝迫繁勝の朝鮮語学書について―附朝鮮語学書目―」、『朝鮮学報』第 9 集、天理：朝鮮学会

桜井義之（1974a）「日本人の朝鮮語学研究（一）―明治期における業績の解題―」『韓』、第 3 巻第 7 号

桜井義之（1974b）「日本人の朝鮮語学研究（二）―明治期における業績の解題―」『韓』第 33 号（第 3 巻第 9 号）：韓国研究院

成玧姸（2008a）「近代日本語資料としての『日韓韓日新会話』」、『日本語学論集』第 4 号、東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室

成玧姸（2008a）「日本語資料としての朝鮮語会話書」『日本語の研究』、第 4 巻 2 号：日本語学会

成玧姸（2014）『近代朝鮮語会話書に関する研究 ― 明治期朝鮮語会話書の特徴と近代日本語の様相』、ソウル：제이엔씨

山田寛人（2009）「『朝鮮文朝鮮語議事録』発行の背景：朝鮮語学習に対する需要の変遷」『北東アジア研究』北東アジア研究（17）,135-155：島根県立大学北東アジア地域研究センター

資料

赤峯瀬一郎（1892）『日韓英三国対話』岡島宝文館 , 国会図書館所蔵

金島苔水（1905）『韓文日本豪傑桃太郎伝』青木嵩山堂 , 国会図書館所蔵

金島苔水（1905）『日清会話語言類集』松雲堂，国会図書館所蔵
金島苔水（1906）『日韓言語合璧』青木嵩山堂，国会図書館所蔵
金島苔水（1934）『日鮮会話独修：対訳』近代文芸社，国会図書館所蔵
金島苔水（1935）『誰にもわかる支那語の初から』近代文芸社，国会図書館所蔵
金島苔水・李鎮豊（1904）『日韓会話三十日間速成』青木嵩山堂，国会図書館所蔵
金島苔水・広野韓山（1905）『韓語教科書』青木嵩山堂，国会図書館所蔵
金島苔水・広野韓山（1905）『独修自在日語捷径』青木嵩山堂，国会図書館所蔵
金島苔水・広野韓山（1905）『対話日韓会話捷径』石塚猪男蔵，国会図書館所蔵
金島苔水・広野韓山（1934）『日鮮語新会話：三カ月卒業 附・文法註解』近代文芸社，国会図書館所蔵
国分建見（1893）『日韓通話』国分建見，国会図書館所蔵
参謀本部（1894）『日韓会話』参謀本部，国会図書館所蔵
島井浩（1902）『実用韓語学』島井浩，国会図書館所蔵
島井浩（1905）『実用日韓会話独学』誠之堂，国会図書館所蔵
島井浩（1906）『実用韓語学』誠之堂，国会図書館所蔵
島井浩（1906）『日韓韓日新会話』青木嵩山堂，国会図書館所蔵
広野韓山 金島苔水（1905）『対訳日韓新会話』石塚書舗，国会図書館所蔵
宝迫繁勝（1881）『日韓善隣通語』宝迫繁勝，国会図書館所蔵
前間恭作（1909）『韓語通』丸善，国会図書館所蔵
松岡馨（1894）『朝鮮語学独案内』青山清吉，国会図書館所蔵
松岡馨（1901）『朝鮮語独習』岡崎屋，国会図書館所蔵
松本仁吉（1894）『日清韓三国対照会話篇』中村鍾美堂，国会図書館所蔵